

# 鷺家口とニホンオオカミ

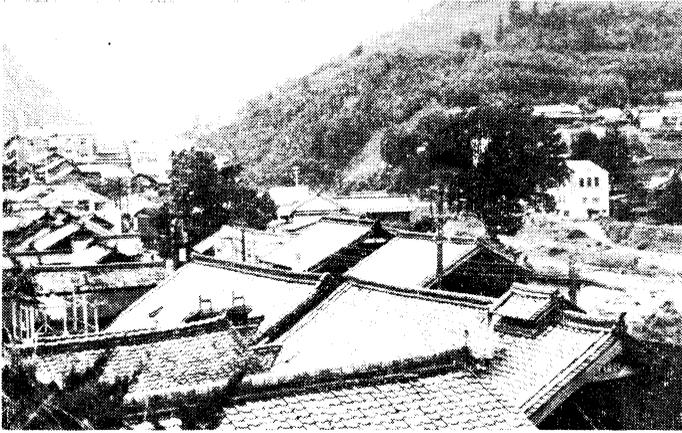
上 野 益 三

## 1

鷺家口<sup>わしかかぐち</sup>は奈良県東吉野村の西の端に近い、同村小川のかつての地名である。東吉野村は吉野郡の東北隅を占め、全村域がほとんど森林に被われた山村である。その東は、高見山と、その南に連る台高山脈とによって、三重県と境せられる。高見山の西斜面に発する木津川<sup>きつがわ</sup>が、大又の谷に出ると、東から来る四郷川を合流して北西に向い、やかて右岸に鷺家川を容れて高見川となる。鷺家口は、鷺家川の狭い谷の口である。かつての伊勢街道（国道 69）が、この谷の口を入り、川に沿って北東に進み、鷺家谷、鷺家を経て、高見山の肩なる高見峠へ通ずる。谷の口を扼する小川（旧鷺家口）は、戸数こそ少ないが<sup>1)\*</sup>、古い宿場で、今は村政、経済の中心である。昭和 33 年 3 月、小川、高見、四郷三村が合併して、現在の東吉野村が発足したときから、小川村鷺家口の名は永久に失われた。鷺家口なる称呼は、わずかに、奈良交通のバス停留所名と、この地の巡査駐在所名とに、とどめるのみである。

高見、大又の谷は奥が深く、流域の山々から伐り出される杉や檜の良材は、鷺家口に集まり、また散ずる。谷は南に開けているから、かつては筏流しの基地の一つでもあった。1863 年（文久 3 年）9 月、いわゆる大和義挙の天誅組敗滅の悲史を秘めた鷺家の谷は、また、今は絶滅して見られないニホンオオカミ（ヤマイヌ）の標本が得られた、最後の地として永く記録に残るべきところである。

\*本篇末の注参照。以下同様。



旧鶯家口（東吉野村小川），むこう（南方）に左右から山が迫っているところが，鶯家川の谷の口である。〔上野写真〕

## 2

鶯家口で 1 頭のニホンオオカミを入手したのは，アメリカ人動物学者 Malcolm Playfair ANDERSON (1879-4-6~1919-2-21)<sup>2)</sup> である。1905年 (明治 38) 1 月 23 日のことである<sup>3)</sup>。彼はイギリスの貴族，第十一代ベッドフォード公爵 (the eleventh Duke of BEDFORD, 本名 Herbrand Arthur RUSSELL, 1858—1940)<sup>4)</sup> の出資によって，東亜の小形哺乳類蒐集の目的で派遣された採集者である。鶯家口に来たときの彼は，間もなく 26 歳になろうという青年学者であった。北米インディアナ州インディアナポリスの生まれで，スタンフォード大学で動物学を専攻し，日本に来た 1904 年に，B. A. を受けている。その前年，1903 年に発表した 2 篇の鳥の論文と，彼の誠実な人柄とが認められ，いわゆる “Duke of Bedford’s Zoological Expedition”<sup>5)</sup> に従事することになったのである。上に言ったように，この動物学探検は，小形哺乳類の蒐集が目的であったが，ANDERSON 自身は，鳥にも興味があったから，行く先々で鳥をも集めた。

の集まる場所があるか、あるいはまた、狩猟を業とする者が少なくなかったことを示すものらしい。事実、鷺家口の北約 12km, 国道 69 号線に沿って、古来製革業で聞えた岩崎というところがある<sup>11)</sup>。鷺家口に持ち出された山の獲物は、この岩崎に運んで売り捌かれたのではなかろうかと、筆者は想像した。この推測は大体当たっていたが、岩崎の一製革業者は、同地では昔から猟師とは直接取引はせず、仲買人の手を経て買い入れていた、と筆者に説明してくれた。ANDERSON にカモシカを売った吉田某が、猟師または仲買人か、あるいは製革業者であったかはわからない。しかし、鷺家口に来ている外国人が、獣類を買い入れるという噂を伝え聞いて、皮に売るよりは金になるだろうと、再び鷺家口へ運んで ANDERSON の手に渡したのだと思われる。岩崎には吉田姓の家が多い。

奈良県庁あたりで、獣類を手に入れたいなら、鷺家口だ位の示唆を受けた ANDERSON らは、ためらうことなく、一路同地を目差したと想像して間ちがいはないであろう。

1905年1月11日、奈良を発った ANDERSON らは、その日は桜井で一泊した。桜井は奈良平野の南の端に近い。当時、鉄道桜井線は奈良桜井間のみで、それより先は開通していない。彼らは桜井駅前大西町（今、本町通一丁目）の皆花楼まいくわに宿をとった。奥まった平屋建の離れ座敷を提供された。この離れは、今次の大戦後、隣家の火災に類焼し、現在は二階建に改築されている。ANDERSON 当時の面影は、この二階屋の前の庭に残っている老松によって偲ぶばかりである。明治初期の様相をもち伝えているこの旅館の古い母屋は、火難を免れたが、既に戦時中にその南半を桜井木材協同組合に譲渡し、全体は ANDERSON 当時よりはるかに小さい。

1月12日、桜井を後にした ANDERSON らは、その日は松山（今、大宇陀町のうち）に泊り、13日に鷺家口に着いた。松山からどの道をとったかはわからないが、恐らく山口を経、佐倉峠を越えて南下したのであろう。このあたりは、まだ山が深いわけではないけれども、多くの荷物を運ばねばならぬ一行の行路は必ずしも容易ではなかったにちがいない。乗合馬車の便さえ、

彼が北米を經って横浜に到着したのは、1904年（明治 37 年）7 月 18 日である。この年は、富士山、東北ならびに北海道を旅行し、12 月に静岡県下の採集を終え、名古屋に來たのが同月 29 日である。年を越して、1905 年 1 月 10 日、奈良に來た。鷲家口での活動がこのあとにつづく。奈良県下ではニホンオオカミが得られるかも知れぬという期待で、同地へ赴いたと思われる。静岡県から後の同行者は、通訳兼助手として雇い入れた、当時第一高等学校の生徒であった金井清<sup>6)</sup>と、獵夫石黒平次郎とである。ANDERSON は石黒を“Black stone”と呼んで親しんだ。

奈良に來た ANDERSON が、まっすぐに鷲家口へ向ったのはなぜであろうか。奈良県下で哺乳類を採集しようとするれば、吉野郡下へ向うのが自然の帰趨であろうが、特に鷲家口を選んだのには、何らかの理由がなければなるまい。1 月 10 日奈良に來た ANDERSON らは、旭館月の家に宿泊し、翌 11 日奈良県庁に出頭して、狩獵の許可を受けている。このとき、彼らは鷲家口を示唆されたのではなからうか。鷲家口の近在には、古來狩獵を副業とする者が多く、專業者も稀ではなかった。山は深く、シカやイノシシをはじめとし、各種の獸類に富んでいる。特に大又の谷は、昔から獲物が多く、1935 年ごろまでは、四郷村には專業の獵師がまだ何人かいた<sup>7)</sup>。1847 年（弘化 4）ごろにできた、畔田翠山（源伴存）の『和州吉野郡中産物志』<sup>8)</sup>に、「小川獵人」という言葉が見え、翠山もこの地で獵師から知識を得たのである。昭和 43 年現在でも、東吉野村全体の獵師副業者は 60 名に達する<sup>9)</sup>。ANDERSON が鷲家口に來たからこそ、偶然の機会であったとはいえ、ニホンオオカミを手に入れることができたのである。彼が來合わせていなかったならば、この 1 頭の貴重な獸は空しく遺棄されて、顧みられなかったにちがいない。

ANDERSON が鷲家口を目差した理由に数え得る根拠がもう一つある。彼らが鷲家口に滞在中の 1 月 15 日に、宇陀郡宇陀村の吉田某から<sup>かもしか</sup>羚羊 2 頭（1 ♂ 1 ♀、後出）を購入している<sup>10)</sup>。宇陀郡は吉野郡のすぐ北東にある。宇陀郡のうちでも、菟田野町と大宇陀町（ともに現在）とは、吉野郡東吉野村のすぐ北に接する。2 頭のカモシカを入手した記録は、宇陀のどこかに、獸類

まだ開けてはいなかった。馬車が通い出したのは大正になってからである。

## 3

イギリスの哺乳類学者 Oldfield THOMAS が 1905 年 11 月に, ANDERSON がそのときまでに, 日本で採集した哺乳類の目録を発表した。<sup>12)</sup> この目録に戴せた哺乳類は 50 種(亜種を含む)に達し, 新名を与えられたものが 12 ある。総个体数は 600 を超え, THOMAS は ANDERSON がすぐれた採集者だと折紙をつけている。この目録の中で, THOMAS は, 鷺家口だけで, また鷺家口でも, 獲られた哺乳類として, 次の 11 種 (2 亜種を含む) をあげている。現行の学名は彼の用いたのとちがうのが大分あるが, 本篇の主題とは無関係であるから, 原文の通り引用する。それぞれの種のはじめにつけた番号は, 彼の目録の番号, ページはその所載ページである。日本名は今筆者が補入した。

16. *Canis hodophylax* Temminck<sup>13)</sup> 1 ♂, p. 342, ニホンオオカミ
17. *Nectereutes viverrinus* Temminck, 1 ♂, p. 343, タヌキ
19. *Mustela melampus bedfordi* Thomas, 2 ♂♂, 2 ♀♀, p. 343, テン
20. *Putorius itatsi* Temminck, 6 ♂♂, p. 343, イタチ
22. *Petaurista leucogenys* Temminck, 3 ♂♂, 1 ♀, p. 344, ムササビ
23. *Sciuropterus momonga amygdali* Thomas (新亜種), 2 ♂♂, 4 ♀♀, p. 344, モモンガ
25. *Sciurus lis* Temminck, 1 ♂, 2 ♀♀, p. 347, リス (ニホンリス)
40. *Lepus brachyurus* Temminck, 2 ♂♂, 2 ♀♀, p. 357, ノウサギ
42. *Sus leucomystax* Temminck, 1 ♀, p. 357, イノシシ
43. *Nemorhaedus crispus* Temminck, 1 ♂, 1 ♀, d. 357, カモシカ
44. *Cervus sika* Temminck, 1 ♀, p. 357, シカ。

合計 33 頭で, 牡が 19 頭, 牝が 14 頭で, 約 58% が牡である。本篇の主題なるニホンオオカミ(上掲, 16号)は若い牡であった。この目録に, ネズミ類のような小形種が全く見当らぬのは奇異の観を与えるが, それらは, 彼の四国旅行(1905年2~3月)中に全部失ったからである。それらの保管を依頼し

た神戸の旅館が、彼の旅行中に隣の火災に類焼し、鷺家口で採集したネズミ類は全部焼亡したためである。なお、鷺家口周辺には、カワウソが多かったといわれるが、ANDERSON の採集物中には含まれていない。キツネも同様である。

筆者が THOMAS の目録から、ことさら上の 11 種を抄出したのは、ANDERSON が鷺家口で何種を何頭手に入れたかを示したかったのと、従来散見する記事中には、彼がニホンオオカミのみを入手したかのような印象を与えるものもあるからである。ANDERSON が 1 月 13 日鷺家口に来て、同月 26 日朝、この地を後にするまで滞在 12 日間である。1 月 23 日には、待望のニホンオオカミが手に入ったし、カモシカやテン、その他の珍らしいものも手に入ったので、25 日に同地での採集を打ち切った。そして、26 日に往路と同じく桜井経由で、同日中に名古屋まで行った。往路は桜井、松山と途中で二泊したので、帰路は一気に名古屋まで出たのである。

## 4

鷺家口で大形獣を購入した当時の様子を、金井清（前出、注 6）の日記<sup>14)</sup>には、次のように誌された。括弧内は上野が挿入。

1905 年 1 月 14 日、10 余貫（約 40kg）の女鹿（上掲、目録、44、1 ♀）、皮のみ剥いで 4 円 50 銭

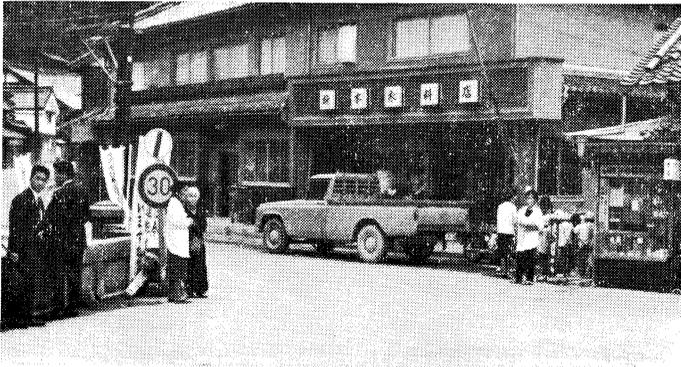
同、1 月 15 日、宇陀村の吉田某から羚羊 2 頭（上掲、目録、43、1 ♂ 1 ♀）を購入、頭と尾とに故障があり、9 円 50 銭。

同、1 月 22 日、猪 1 頭（上掲、目録、42、1 ♀）、3 円 50 銭

同、1 月 23 日、狼（上掲、目録、16、1 ♂）、8 円 50 銭

その他に、タヌキ、ムササビ等も買い入れた。この 23 日に買った 1 頭のニホンオオカミが、「日本で採集された最後の狼にならうとは当時想像も及ばない所であった。」と、33 年後に、金井が当時を回想して書いている<sup>15)</sup>。

鷺家口に来た ANDERSON らは、旅館芳月楼、<sup>ほろけつ</sup>前北丈太郎方に宿をとつ



千代橋上から見た、かつての芳月楼（現在、衣料店）。〔上野写真〕

た。佐倉峠を越え、鷲家口から川に沿って南へ下る路は、やがて川の左岸に移り、カーブを描いて緩い下りで、鷲家口の北のはずれに入る。しばらく行くと、上市から来る国道が鷲家川に架る千代橋を渡ったところで、宿場を貫く街道とT字形に合する。このT字の突当りに芳月楼が道路に面して立っていた。この家から見れば、橋は路を隔てて真向いである。橋の下は、岩盤が



千代橋上から上流に向けて見た鷲家川。左方の岩上に「天誅義士 穴戸弥四郎先生戦死之地」と刻した石碑がある。〔上野写真〕

左右から相迫って、狭い川は奔流をなしている。対岸は急斜面をなして川に落ち、水辺には雑木雑草が生い茂っているが、その背後は杉林である。道路に面した二階の座敷を提供された ANDERSON、金井らは、眼下に千代橋や対岸の杉林を眺めることができた。芳月楼は楼主前北氏の死没後、人手に渡って名も森本楼と改められたが、現在は改築されて橋本衣料店という衣料雑貨の店になっている。ANDERSON 当時を彷彿するものは、国道幅拡張のために、改築を余儀なくされることがなかった、川沿いの民家数戸と、芳月楼の南寄り背後の一段高い土地に建っている、<sup>うえたに</sup>上谷萬吉氏所有の古い住宅のみである<sup>16)</sup>。

ANDERSON らは、芳月楼を根拠として、四方に採集にでかけた。遠く四郷村（大又の谷、現在は東吉野村のうち）へも行った。1月14日に、牝シカ1頭を買ったのは、鷲家川を遡った鷲家谷の一猟師の家であつたらしい。「我等の滞在は間もなく近村の話題にのぼり種々の獲物を売りに来た。」（金井、前掲注14）とあるから、追々居ながらにして、種々の動物を入手することができたのである。ただ、外国人を見たいという物珍らしさから、弁当携帯で遠くから鷲家口へ来た人たちも少なくなかったということである。それらの人々が噂をひろげるのに役立つにちがいない。

そのうち、1月23日に、思いがけなく狼が担ぎこまれた。「或る朝（注：1月23）、その日に採集した鼠を剥製して居た時、二三人の逞しい猟師が一匹の狼を擔いでやって来た。」（金井、前掲）のである。「その日に採集した鼠」とあるのは、前夜に罾を仕かけ、<sup>トラップ</sup>早朝それらにかかった鼠を指す。オオカミは買取りの値段で中々に折合がつかない。「杉林の中の日あたりの良い宿屋の縁側に初春の日光をあびながら長い間かゝっての談判である。」（金井、前掲）。しかし、交渉は不調に終り、猟師たちはオオカミを担いで立ち去った。「此の時のアンダーソンの失望は言語に絶するものだった。元来無<sup>（口）</sup>言のアンダーソンが買へば良かった、再び手に入らないかも知らぬ、<sup>（れ）</sup>と一人言を云ひながら片足立てゝ縁側に腰かけて居た顔つきは33年後の今日もなほ僕の目にありありと残っている。」と金井（前掲、注15）が回想している<sup>17)</sup>。

ANDERSON が再び手に入らないかも知れぬと言った杞憂は、幸いこの日再び狼が運び込まれ、彼の手に入ったことで消え去った。しかし、もし、彼の手に渡っていなかったならば、この1頭の最後のオオカミは空しく遺棄されて、どこにも残らなかったかも知れない。垂涎万丈の標本が8円50銭で自分のものになった。金井は「アンダーソンと共に鋭利なナイフを持って皮を剥いて居る間、3人の猟師は煙管を吸ひながら眺めて居った。腹は稍青みをおびて腐敗しかけて居る所からみて数日前に捕れたものらしい。」ことに気がついた。厳冬のさなかに、この状態になっていたのであるから、死後相当の日が経っていたことは間違いない。大きい獣の皮を剥ぐために、彼らは前北から大分苦情をいわれていたので、恐らく橋向うの杉林に運んで処理したのであろう。さきの値段の交渉のところでも、「杉林の中の日あたりの良い宿屋の縁側」とあるけれども、付近の情景を取り入れて印象をしるしたのではなかろうか。芳月楼の後ろは高い崖で、崖の上には2学級をみの鷺家口尋常小学校が建っていた。今は登記所になっている。その南西に隣して、東吉野村役場がある。

## 5

ANDERSON が手に入れた1頭のニホンオオカミは、果たしてどこで獲られたのであろうか。近年トラック輸送がはじまるまでは、鷺家口に集った杉材や檜材は、筏に組んで高見川を流し、さらに吉野川を下して、上市等まで運んだ。鷺家の谷と大又の谷とが合して、高見川となるあたりに、秋の彼岸過に川を横断して堰を設ける。その上流に水がたまってダム湖のようになるのを待って、その“湖”上で筏を組む。そして、堰を切って放水とともに筏を流す。これを繰り返えし、春にアユが遡上するまでに堰を撤去するのが習わしであった。ANDERSON が鷺家口に来た1905年の1月の上旬は特別に寒気が厳しく、堰の上流の停滞水に氷が張った。筏組み作業中の筏師らは、突如1頭のシカがオオカミに追われて杉林から走り出てくるのを見た。追いつ

められたシカは氷殻上に乗り、氷を突き破って四ツ足を取られ、迫ってくるオオカミもまた、氷殻に足の自由を奪われた。筏師らは有合せの得物を振ってこのオオカミを撲殺した。そして、その屍体をそのまま打ち棄ててあったが、日を経て、外国人が獣を買うというのを聞いて担ぎ込んだのだという<sup>18)</sup>。さきに述べたように、この地には猟師を副業とする者が多いから、ANDERSONの前に現れた3人の猟師は、筏師たちであったかも知れない。

以上の話は少しでき過ぎているようなフシもあるが、仮にこの話に信憑性があるとすれば、最後の標本となった ANDERSON の狼は、奥地ではなく、鷲家口で獲れたこととなる。その頭骨は、今、大英博物館（天産部）の所有である<sup>19)</sup>。毛皮も同館の所有であろうが、筆者はその詳細を知らない。屍体が運びこまれたとき既に腐りかかっていたのだから、毛皮は完全な状態で保存されなかったのかも知れない。

前掲 THOMAS の目録の 16. *Canis hodophylax*<sup>20)</sup> Temm. の条下(p.342)に、ANDERSON が標本につけておいたノートとして、次の一文が採録してある。

“The Wolf was purchased in the flesh, and I can learn but little about it. It is rare, some say almost extinct. Japanese name ‘Okami’ or ‘Aamainu.’ —M.P.A. 文中、“in the flesh” とあるのは、皮だけを剥いで買ったのではなく、肉つきのまま、つまり屍体で手に入れたことを記録したのである。また、“almost extinct” の二語は、1905年の時点で重大な意味をもつ（後述参照）。最後の ‘Aamainu’ は Yamainu の誤記か誤植かである。古来ニホンオオカミはヤマイヌといいならわして来たものである。

なお、大英博物館（天産部）に保管されている ANDERSON 入手の狼の頭骨には、1905年5月30日大和鷲家口と記した付箋がある<sup>21)</sup>。これは博物館が受領した日付か何かで、鷲家口で入手した時から4カ月余を経過している。正しい採集時を記録したものとは言い難い。

## 6

ANDERSON が鷲家口で1頭のニホンオオカミを手に入れてから、1968年の今までに60年以上の歳月が経っている。その間、ただの一度もニホンオオカミが獲られたという学術的報告はない。各府県の累年狩猟統計でも仔細にしらべてみれば、どこかに狼の記録があるかも知れないが、それは今急には実行できそうにない。また、記録に残らぬものも数多くあるにちがいない。今、言えることは、1905年という、はっきりした年ではなく、それから数年——あるいは十数年かも知れないが——の時の経過の間に、ニホンオオカミは人知れず死に絶えたのだらうということである。しかし、彼らが、なお、どこかに生き残っていると信ずる人たちが、後を断ったわけではない<sup>22)</sup>。それらの残存説者たちは、しかし、その残存の真相を究めつくしているとはいえない。絶滅を主張するだけの確実な根拠はないけれども、本種はもはや、わが国土から姿を消したとみて、まず、誤りはないであろう。本篇のこれまでの記述も、この前提に立って進めてきた。そこで、前掲のANDERSONのノートに、“some say almost extinct” とあるのは、何気なく書きつけたのであろうが、ニホンオオカミ衰亡史上に、大きい重みをもった言葉として残ることになる。

F.P. von SIEBOLD の“Fauna Japonica”哺乳類の部の執筆を担当した、Coenraad Jacob TEMMINCK がニホンオオカミの記載を発表したのが1844年(弘化1)である。しかし、該書のニホンオオカミの彩色図版(tab. 9)は、既に1842年に出版され<sup>23)</sup>、この狼の存在を西欧に知らせた。それから37年後の1881年(明治14)に、東京大学理学部のお雇いドイツ人地質学教師David BRAUNS<sup>24)</sup>が、ニホンオオカミを詳しく観察して短文を発表した<sup>25)</sup>。彼は動物学にも興味があり造詣も深かったのである。その文中で、BRAUNSは、“These animals are very rare now in the main-island, but are less rare in Yezo.”と書いている。この文章では、本州の狼と、Yezo(北



D. BRAUNS が発表したニホンオオカミの図 (1881).  
原図は左右 16.5cm.

海道)の狼とを同一種と考えているらしく見えるが、「本州には今では極めて稀だ」との一句は、彼の実感によるものなるべく、重要な意味をもつ。BRAUNS の文に添えたニホンオオカミの図<sup>26)</sup>は、左右 16.5cm の大きさで、“well figured by our artist” と自讃しているから、もっともその真を伝えるものであろう。BRAUNS は、また、オオカミが本州ではキツネやタヌキのように、われわれが度々出会う動物でないことを指摘する (“all these other animals of the dog-tribe are much more frequently met with at least in the main-island than the *Canis hodophylax*.”)。そして、それでも、狼が日本人にはよく知られている動物だと指摘する (なお後出、直良<sup>27)</sup>参照)。

BRAUNS のこの文の発表後 24 年、1905 年に、ANDERSON をして、“almost extinct” と記録させたのは、恐らく真実であったのにちがいない。つまり、明治初年ごろには、ニホンオオカミの個体数は既に著しく少なくなっていて、それから後激減の一途を辿ったと見られよう。そして、明治 30 年代には極めて稀になっていたことは、ほぼ間違いないであろう。また、「狼が人の心に大きく姿をとどめながらも、実際にはさほどこの日本に棲息していなかった……」(直良信夫<sup>27)</sup>) という見方がある。この見方は上掲 BRAUNS

の観察と一脈相通ずるものがある。さらに、今から130年も前の1840年前後の話として、狼の激減を記録した聞書が『遠野物語』<sup>28)</sup>にある。岩手県釜石市の西、遠野郷（今、遠野市）での聞書であるが、「和野の佐々木嘉兵衛、或年境木越（注：界木峠きかいぎ）の大谷地おほやちへ狩にゆきたり。死助の方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り盡し山もあらは也。向の峯より何百とも知れぬ狼此方へ群れて走り来るを見て恐ろしさに堪へず、樹の梢に上りてありしに、其樹の下を夥しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。その頃より遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。」とある。この狼の行方はわからない。

BUNNELL <sup>29)</sup>が、ニホンオオカミ (*Canis hodophilax*; この *i* の綴りを用う) が、20世紀になってから害獣として滅んだとしているのは、北海道の狼が作為的に滅ぼされたのと混同したのである。この著者らが、北海道の狼も *Canis hodophilax* であって、*C. lupus* ではないと思っていることは、BRAUNS と同じである。北海道では、狼の全滅作戦が効を奏して、1889年（明治22）ごろから後、全く姿を消して再び見られない<sup>30)</sup>。それでも、狼の足跡を見たとか、狼らしい獣を見たとかという、残存の話が尾を引いた。これはニホンオオカミの残存説が今でもあるのとよく似ている。

ANDERSON のときから、およそ50年後、岸田日出男は、「四五十年前（注1905年前後）迄は夥しく棲息しておった日本狼も、今日では、全く絶滅したと信ぜられるやうになった。が、果して絶滅したと断定してよいか、どうか。」<sup>31)</sup>と疑いを残している。この文中、「夥しく棲息しておった」という言葉は、果たして真であろうか。ちょうど、ANDERSON が鷲家口に来たころのことである。もっとも、岸田氏がもっとも関心をもった大台ヶ原山一帯には、明治初年にはまだかなりの数の狼がいたらしい。1874年（明治7年10月15日）尾鷲を發して大台ヶ原山に登った英人 Captain St. JOHN が、山中に狼が多くて、昼間でも近づいて来て吠えた（“Wolves are abundant; they howled even during the day time close to us.”）<sup>32)</sup>と書いている。同人は英国の小型測量艦“Sylvia”の艦長で、日本沿海測量の途次、尾鷲に入港

し、停泊中の機会を利用して大台登山を試みたのである。

## 7

前節に述べたように、ニホンオオカミが明治初年以降激減の一途を辿ったとすれば、その原因は何であろうか。筆者は、彼らが自滅するだけの原因は、彼ら自らの中に発生したのはもちろんだと考えるが、その過程については柳田国男の考説<sup>33)</sup>が、聞くべきものを含んでいると思う。柳田氏は、まず、狼の群に、何らかの原因で解体と分散がはじまったのが、彼らの悲劇の発端だと仮定する。彼らの数の減少、もしくは絶滅を信ぜしめるようになったのは、孤狼になったからである。群行動の必要性を減退させたのは、家畜のような、逃げ走らぬ食料の増加が、食物の独占に便利になったからだろうと、柳田氏は説く。しかし、孤狼になったがために、一旦交配期に入れば、配偶を見つけ難く、生殖率の激減を来すにちがいない。この柳田氏の仮説がある程度当たっているとすれば、その過程にはかなり長い時間を要したであろう。そして、今から100年位前には、既に激減の状態に近づいていたことは、前節に述べた通りである。さらに、明治改元以降の急激な文明開化が、狼の衰亡に拍車をかけたといえそうである。狼の末路を流行病による大量斃死をもって説明しようとする人々があるが、これには十分な根拠を伴わない憾みがある。交配の機会の著しい減少が、自滅の一途を辿らざるを得なかったとする考えは、無理の少ない見方であろう。岸田氏（前掲）が夥しく棲息していたと見ているのは反対に、ANDERSON の許へ狼を担ぎ込んだ猟師たちは、この獣が鷲家口界限では、もはや容易に手に入らぬことを熟知していたのにちがいない。ANDERSON の垂涎万丈の表情を素早く見てとった彼らが、高値を吹きかけ、四、五円値切られて、なお、ようやく8円50銭に落ちついた経緯は、よくこの間の事情を物語っている<sup>34)</sup>。

さきに述べたように、明治後急に狼が減少したとしても、1880年ごろに

は、捕獲の可能性はまだあったと思える例証がある。1878年（明治11）6月26日に、1頭の生きたニホンオオカミ（性不明）が、ロンドン動物学会の動物園<sup>35)</sup>に寄贈された。寄贈者は同学会会員 H. Heywood JOHNES という人である。どういう経路で、日本から入手したのかわからない。しかし、それはロンドン動物園がはじめて収容した動物で、見物人をよろこばせたにちがいない。この1頭の狼については該動物学会の1878年11月5日の例会の席上で、学会秘書の Philip Lutley SCLATER によって報告された<sup>36)</sup>。SCLATER は動物地理学上の業績に富む、知名の動物学者である。例会の座長は Arthur GROTE であった。このときの SCLATER の説明では、今度新しく入った狼は、その小形なのと脚が短かい点とで、ヨーロッパの狼とは別種のような、と述べている（“judging from the present specimen the Japanese Wolf, although nearly allied to *Canis lupus*, would seem to be a distinct species, to be recognized by its smaller size and shorter legs.”）。この生きたニホンオオカミを見た Thomas Henry HUXLEY が、*Canis hodophylax* は、ただ狼（注：ヨーロッパ狼、*Canis lupus*）の小形のものらしい。しかし、その頭骨が手に入らぬ今は、決定的な意見を述べることは差扣えると書いた<sup>37)</sup>。このニホンオオカミがその後どうなったか、よくわからない。1頭きりであったから、子孫が残らなかったことは確かであろうが、その遺骸はどうなったであろうか。

上記 HUXLEY の文中に、“there is a fine specimen now living in the Gardens” の1句があって、われわれ日本人を羨しがらせる。Gardens はもちろんロンドン動物園を指す。動物園施設の著しく立ちおくれた日本では、生きたニホンオオカミを目の当り見ることができなっただろうし、今ももちろん見られない。ある国土に生を承けた動物が衰び去る運命を担わねばならぬとは、哀れといわずして何であろうか。せめて動物園にその後裔が見られたならとは、筆者一人の嘆きではあるまい。HUXLEY が待望したニホンオオカミの頭骨は、ANDERSON によってロンドンに送られたが、それは彼の没後10年目であった。もっとも、大英博物館（天産部）には、それより

前に、「秩父地方産，1886年（注：明治19）1月28日，E. W. JANSON」という符箋つきのニホンオオカミの頭骨が1個既に入っていたから，HUXLEYはあるいは生前にそれを見たかも知れない。

## 8

1905年，奈良県鷲家口で獲れた1頭のニホンオオカミについて，その入手の経緯，ならびにその動物学史的意義について述べた。この狼はよく研究せられ，“Washikaguchi”の名とともに，広く世界の学者の知るところとなった。獲られた年が移り変らないうちに，いち早く THOMAS によって報告されたからである。ANDERSON も THOMAS も，この1頭の狼が，この島国での最後の標本になろうとは，全く予期しなかったにちがいない。この標本が日本国内に残らなかったのは残念であるが，学界に貢献して永く名をとどめたことは，日本の狼の最後を飾ったものといえよう。

筆者がこの一篇をつくった目的は，日本の動物学史の一齣としたいためである。厳密な科学史的方法では，動物学史に動物変遷史は含まれない。しかし，動物学の研究対象が動物であってみれば，広い意味で，動物の栄枯盛衰もまた，それらの研究者との関連のもとに，動物学史で取り上げるべきだとは，筆者の持論である。それは，なお，医学史において疾病史が重要なものと同様である。本篇はそういう試みの一つである。

## 謝 辞

東吉野村村長松山清太郎，同助役和泉政治郎，同経済課長中尾稔の諸氏は，筆者に多大の便宜を与えられた。特に中尾課長は，同役場の上大谷年弘氏とともに，小川（旧鷲家口）および周辺を案内して，筆者に多くの知識を与えられた。また，近畿日本鉄道株式会社鉄道総局営業企画部の尼崎博氏は，筆者と行を共にして，東道と斡旋の労を執られた。これら諸氏の厚意に対し，ここに衷心より深謝の意を表したい。さらに，鷲家口出身の上谷萬吉氏（在大阪市）が特に筆者を引見して，有益な談話に時間を割か

れたことを、感謝をもって特記せねばならぬ。最後に、日本学士院会員大島廣先生が、一高時代同寮生活者であった金井清氏について、有力な示唆を与えられたことに對し、厚くお礼を申し上げたい。

### 〔注ならびにノート〕

- 1) 旧鷺家口は国道を挟んで南北に約 500m, 戸数は 230 を出ない。
- 2) ANDERSON, M. R.: Malcolm Playfair Anderson. *Condor*, vol. 21, p.115—119, 1919. M. R. ANDERSON は Malcolm の父。江崎悌三: 「Duke of Bedford の動物学探検」。植物及動物, 3 卷 7 号, p. 1349 以下, 1935.
- 3) 上掲, 江崎, p. 1353. これは金井清氏の日記をもとにした記録。本篇中の日付はこれに従う。直良信夫: 『日本産狼の研究』(東京, 校倉書房, 1965) に, この日付を“明治 37 年 (1904)”としてあるのは (p. 248, 252), ANDERSON 来日の年を誤って用いたものであろう。
- 4) 江崎博士が上文 (注 2) を執筆当時, この人は 77 才 (江崎博士は“現在 80 才に近い高齢”と書いている), ANDERSON を日本へ送った当時は 46 才の壮年であった。BEDFORD 公は動物が好きで, Bedfordshire の宏大な邸宅 Woburn Abbey の庭園に, 多くの鳥獣を集めて飼育した。また, 動物学者の Sir Peter Calmers MITCHELL (1864—1945) と協力して, Bedfordshire 州 Dunstable 付近に自然動物園を設置した。1899 年から 1936 年まで, ロンドン動物学会の会頭であった。この学会と大英博物館との共同企画で, ANDERSON を日本および東亜へ派遣したことは, この BEDFORD 公の興味が大きく物を言っている。その出資が直接その実現を可能にしたのである。
- 5) 江崎, 前掲, p. 1348 ff.
- 6) 金井清 (1884—12—7~1966—4—26) は, 長野県上諏訪 (今, 諏訪市大字上諏訪) の生まれてある。1903 年, 第一高等学校に入学, 1907 年卒業, 引きつづいて東京帝国大学法科大学に入り, 1911 年政経学科を卒業。金井が ANDERSON と行動をとともにした 1905 年は, 一高三年のときで, 21 才である。ANDERSON が *Japan Times* に出した求人広告に応募した市河三喜 (1886~; 現, 日本学士院会員, 東京大学名誉教授) が急に支障を生じたので, 同じ一高生の金井が代ったのだという。1905 年も次の 1906 年も, ANDERSON に協力したためか, 4 年間を費して一高を卒業している。東大卒業の年, 鉄道院書記となったのを振り出しに, 金井は終始鉄道畑で活動し, 1925 年 (大正 14 年) には, 鉄道省書記官になっている。1926 年以後の金井は, 大陸に出て満鉄等で重要な地位にあった。その後, 1945~1955 年には, 途中 3 年間の空白を置いて, 前後 6 年間, 選任されて郷里諏訪市に

市長であった。市長退職後は再び鉄道に入り、昭和41年死没したときには、社団法人世界貿易センターの理事であった。1938年(昭和13)12月21日、立川飛行場を軍用機で出発した金井は、「奈良県の上空でふと下を見下すと杉林の密林である。その時33年前此の杉林の中の鷲家口の宿に、M. P. アンダーソンと共に二週間ばかり滞在して多くの動物を採集した事を思い出した。」(後出、注15)と当時を述懐している。このとき、金井は新たに中支那振興株式会社の理事に就任し、上海へ赴くところであった。

- 7) 四郷の久保清右衛門氏談話。
- 8) 上野益三：「和州吉野郡中産物志」について。奈良女子大学生物学会誌, No. 10, p. 70—74, 1960.
- 9) 東吉野村役場の記録。
- 10) 金井氏の日記(江崎, 前掲, p. 1839に引用)。
- 11) 現在は、中国、メキシコ等から輸入の原料皮の鞣皮作業が中心である。ANDERSON 当時は大部分国産皮に依存し、特にイノシシ皮の農業者用靴製造が盛んであった。また、筏づくり用の藤蔓を鷲家口等へ供給するもの、この仕事の一つであった。
- 12) THOMAS, O.: List of mammals obtained by Mr. M. P. Anderson in Japan, 1905. *Proc. Zool. Soc. London*, 1905, vol. 2, p. 331—363.
- 13) 哺乳類学者は、現今、*Canis lupus hodophylax* TEMM.なる亜種とし、北海道の狼を *C. lupus hattai* KISHIDA とする。しかし、ここでは、混雑を避けるため、ANDERSON 当時通り、ニホンオオカミを *C. hodophylax*, エゾオオカミを *C. lupus* として記述する。また、古くから用いられているヤマイヌの称呼を避け、ニホンオオカミを用いた。
- 14) 江崎, 前掲(注2), p. 1839.
- 15) 金井清：「日本で捕れた最後の狼」。満洲生物学会会報, 2巻, 2号, p. 19—20, 1939. 前出, 注6参照。
- 16) この家は、上谷氏が大阪市在住のため、平素は閉じてある。この家の前の下、つまり、かつての芳月楼のすぐ南側は、ANDERSON 当時は上谷氏所有の畑地であった。当時小学校の上級生であった上谷氏は、斜め下の二階座敷に起居するANDERSONを時折目にすることができた。後年、上谷氏は上記畑に貸家を建て、現在は飲食店芳月、果物屋、自動車屋などが国道に面して軒をならべている。かつての芳月楼と現在の芳月との間に、村役場へ登る狭い石段道がある。小谷氏は、造作家具室内装飾設計施工の株式会社上谷製作所の代表取締役である。
- 17) このときのいきさつについては、いくつかの文がつくられている。高島春雄：「栄枯盛衰両面鑑(衰退者と侵略者)」, 図解科学(中央公論社), No. 10, p. 48—55, 1942; 川合 禎次：「狼の話」, ひかり(近鉄総務局), 1953—X, p. 18—

- 20 ; 戸川幸夫：「狼と山犬」、『戸川幸夫動物文学全集』（冬樹社，東京），巻 10，p, 97—131, 1966.
- 18) 小川（旧鷺家口）の古美術商亀屋主人亀井恭蔵氏の談話。同氏先代の見聞。
- 19) 阿部余四男：「ヤマイヌに就いて」，日本犬，2巻，2号，p. 1—9, 6 pls., 1934  
〔ANDERSON 採集の狼の頭骨の写真を載せる。この写真は同博士の次の文にも収む〕。ABE, Y. : On the Corean and Japanese wolves. *J. Sci. Hiroshima Univ.*, ser. B, div. 1, vol. 1, p. 33—37, 5 pls., 1930.
- 20) TEMMINCK の原著 (*Fauna Japonica, Mammalia*, p. 38) には, *Chien hodophile* (*Canis hodophylax*) となし, 図版 (tab. 9) では, *Canis hodophilax* とし, *h* がなかつたり *y* が *i* になつたりしている。直良博士の『日本産狼の研究』（注 3）では, この図版（この方がさきに出了ことは本文中に記した）通りに, *hodophilax* が使つてある (p. 233, 290)。
- 21) 阿倍, 前掲, 注 19, 日本犬, p. 4.
- 22) 岸田日出男：「日本狼物語」, 吉野史談会機関雑誌『吉野風土記』, No. 21, p. 1—41, 1964 (トーシヤ版) ; 津田松苗：「十津川の鳥獣」, 『十津川の生物』（十津川村刊, 1961）, p. 3—14, 等に集録。また, 阿部余四男：「日本狼は現存するか」, ケルン, No. 27, p. 20—24 (27), 1933. 阿部博士は絶滅を説きながら, なお残存の余地を残している。この文はもう 35 年も前のことである。悲太猪之介氏（『奥吉野動物記』, 朝日新聞社刊, 1957）は大正 10 年（1921）前後までいたと考えている。
- 23) 江崎悌三：「Philipp Franz von Siebold の *Fauna Japonica* 解説」（植物文献刊行会, 東京, 1935）による。*Fauna* の p. 25—40 と tab. 11—20 は第二分冊として, 1844 年に刊行されたが, tab. 1—10 は p. 1—20 ととも, 第一分冊として, 既に 1842 年に刊行されていた。Tab. 9 の材料となつたニホンオオカミは産地を明記していない。SIEBOLD は江戸へ赴く途中, 大坂天王寺の動物商で, 「一匹のオオカミと野生のイヌ（ヤマイヌ—*Jama-inu*）を買つたことがある。」（斎藤信訳, 『江戸参府紀行』, 東洋文庫 87, 平凡社, 1967, p. 241）。呉秀三訳（異国叢書本, 1928, p. 573）では, 「狼（オカメ）*Okame* 一匹と豺（ヤマイヌ）*Jama-inu* 一匹」とを買入れたとなっている。この *Jama-inu* が斎藤訳のように野生の犬となっているのは, すこぶる明快である。オオカミ, すなわち, ニホンオオカミをヤマイヌと同一物する人と, 別物とする人とがあるからである。
- 24) 上野益三：『お雇い外国人, 3, 自然科学』（鹿島研究所出版会, 東京, 1968）, p. 45.
- 25) BRAUNS, D. : On *Canis hodophylax* (Temminck and Schlegel) or Japanese Wolf. *The Chrysanthemum*, vol. 1, p. 66—67, 1 fig., Feb. 1881, Yokohama, Kelly & Co. 上記学名の命名者に SCHLEGEL が連記してあるが, これは

- TEMMINCK ただ1人、また命名者名に括弧は不要。
- 26) この図と、TEMMINCK の図(注20)と、どちらが真を伝えるものか。どちらも耳殻が小さいことでは一致しているが、脚が短いという特徴では、TEMMINCK の図は少しスラリとし過ぎてている。BRAUNS の図は、MIVART, St. G.: *A Monograph of the Canidae* (R. H. Proter, London, 1890) に転載されている。
- 27) 前掲, 『日本産狼の研究』, p. 244.
- 28) 柳田国男: 『遠野物語』。角川文庫本(83—5, 1955), p. 31 による。
- 29) BUNNELL, Fred and Pille: *Extinct and Vanishing Animals*. Revised English edition of V. ZISWILER'S *Bedrohte und Ausgerottete Tiere*. X+133 pp. 73 figs. The Heidelberg Science Library, Vol. 2. Springer-Verlag, New York Inc., 1967.
- 30) 犬飼哲男(哲夫): 「絶滅した北海道の狼」。日本犬, 2巻, 1号, p. 5—11, 1 pl., 1933.
- 31) 前掲, 注 22.
- 32) Captain St. JOHN, R. N.: *An excursion into the interior parts of Yamato Province Trans. Asiat. Soc. Japan*, Vol. 3, p. 35—48, 1875.
- 33) 柳田国男: 「狼のゆくへ、ならびに狼史雑話」。ともに、『孤猿隨筆』(創元選書, 38, 1939), p. 217—283 に収載。なお、『定本柳田国男集』, 第22巻, (筑摩書房版), p. 307—460, 1926, に収む。
- 34) ANDERSON は全部で30円に近い、予定以上の獲物を買ったので、旅費がなくなり、金井氏に借りてやっと帰れたという(金井, 前掲15)。懐中が乏しくなり、支払いにもいざこざがあったのか、1月26日早朝出発に際し、芳月楼の前で楼主前北と ANDERSON とがはげしい口論をしたという(上谷万吉氏談話)。
- 35) Regent 公園にある動物園 (Gardens)。ロンドン動物学会所属、同学会蒐集の野生動物を收容する。1827年4月27日開園。創案者は Sir Thomas Stanford RAFFLES (1781—1826) である。
- 36) The secretary on additions to the menagerie. *Proc. Zool. Soc., London*, 1878, p. 788.
- 37) HUXLEY, T. H.: *On the cranial and dental characters of the Canidae. Proc. Zool. Soc. London*, 1880, p. 238—288.